



和漢朗詠集

平家於竹講釋入

下

特別
イ 4
3163
24(2)



新撰 新編 新集 新書 新序

新撰 新編 新集 新書 新序
新撰 新編 新集 新書 新序

新撰 新編 新集 新書 新序

新撰 新編 新集 新書 新序

新撰 新編 新集 新書 新序

新撰 新編 新集 新書 新序

和漢詩集卷之四

雜

風

雲

晴

曉

松

竹

菊

梅

猿

管絃

竹舞妓 文詞 竹 意 文

淫

山竹

水 竹 漁父

禁中

古系

坂

竹校 龜

仙家

竹 居士 隱 儂

山家

田家

隱居

山寺

仙事

僧

采 昆

船

勝 別

坊 猿

廣 中



ていこう 帝王 月法皇 親王 付王孫 丞相 執政
将軍 刺史 詠史 王昭君
妓女 抱女 志人 交友 懷意
述懐 奇賞 祝意 奇賞 白
初人のこゝろといはれ世ははらへ
初人のこゝろといはれ世ははらへ
初人のこゝろといはれ世ははらへ
初人のこゝろといはれ世ははらへ
初人のこゝろといはれ世ははらへ

和漢洞淵集卷下

雜風

春風晴秀庭花樹夜雨佳景
入松易乱秋桐月老泥流水
魚送列子

漢皇月中吹多狂海島塚
相拒裁衣色清尚列子
列子然亦不淫
列子然亦不淫
列子然亦不淫

和漢洞淵集卷下

○まの風がうらやまの樹のぼけを
○まの風がうらやまの樹のぼけを
○まの風がうらやまの樹のぼけを
○まの風がうらやまの樹のぼけを
○まの風がうらやまの樹のぼけを

和漢洞淵集卷下

雲

竹姓湘浦之激鼓琴之聲
月老以蕭之地

山遠之埋行路
松色風破松人夜

晝日望雲心
暮景有時見月夜正用

潭水盈春之朝
望孤舟之月海東

靜越之香眼
泥水之流之煙

碧信濟通北戴之
松後法堂生松

漢帝於款迷
雲之淮王鶴翅失面連

あつちの山
あつちの山
あつちの山
あつちの山

晴

煙消門外喜
山色漸生
紫竹林

山色漸生
紫竹林

布之泉波冷
月洗日十尺之銀

雲消想落
了膚新風動
清漸水面散

雙鶴出
舞拍青
孤帆連
水白之清

均芳鶴舞
日高見
飲酒於舞臺

あつちの山
あつちの山
あつちの山
あつちの山

○光緒の女帝の崩れ
一とほは湘浦の激鼓琴の聲

○竹姓湘浦の激鼓琴の聲

○月老以蕭之地

○山遠之埋行路

○晝日望雲心

○潭水盈春之朝

○靜越之香眼

○碧信濟通北戴之

○漢帝於款迷

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

○あつちの山

曉

○松之... 月... 松...

○松之... 月... 松... 松...

佳人... 殘月... 鳥鳴...

... 子... 松...

... 松... 松...

... 松... 松...

あつ... 松...

松

但有... 松...

... 松... 松...

... 松... 松...

... 松... 松...

○灯の...
一...
...

○...
...

○...
...

○...
...

○...
...

○...
...

○...
...

○...
...

○...
...

○...
...

○...
...

○...
...

頓今...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

和漢明詠集下

七

○秋の夕べの月をいふと、早稲の穂の
 黄金色と、つばきの花の白と、さくら
 の花の赤と、あざやかな秋の景色を
 描き出す。○秋の夕べの月をいふと、
 早稲の穂の黄金色と、つばきの花の
 白と、さくらの花の赤と、あざやかな
 秋の景色を描写する。○秋の夕べの
 月をいふと、早稲の穂の黄金色と、
 つばきの花の白と、さくらの花の赤と、
 あざやかな秋の景色を描写する。

不居屋の秋夜
 不居屋の秋夜、早稲の穂の黄金色と、
 つばきの花の白と、さくらの花の赤と、
 あざやかな秋の景色を描写する。○
 秋の夕べの月をいふと、早稲の穂の
 黄金色と、つばきの花の白と、さくら
 の花の赤と、あざやかな秋の景色を
 描写する。○秋の夕べの月をいふと、
 早稲の穂の黄金色と、つばきの花の
 白と、さくらの花の赤と、あざやかな
 秋の景色を描写する。

禁中

○秋の夕べの月をいふと、早稲の穂の
 黄金色と、つばきの花の白と、さくら
 の花の赤と、あざやかな秋の景色を
 描写する。○秋の夕べの月をいふと、
 早稲の穂の黄金色と、つばきの花の
 白と、さくらの花の赤と、あざやかな
 秋の景色を描写する。○秋の夕べの
 月をいふと、早稲の穂の黄金色と、
 つばきの花の白と、さくらの花の赤と、
 あざやかな秋の景色を描写する。

風池浮面新秋月
 風池浮面新秋月、早稲の穂の黄金色と、
 つばきの花の白と、さくらの花の赤と、
 あざやかな秋の景色を描写する。○
 秋の夕べの月をいふと、早稲の穂の
 黄金色と、つばきの花の白と、さくら
 の花の赤と、あざやかな秋の景色を
 描写する。○秋の夕べの月をいふと、
 早稲の穂の黄金色と、つばきの花の
 白と、さくらの花の赤と、あざやかな
 秋の景色を描写する。

古来

中道を渡るもの、神を祀りて
其の徳を以て、ちりちりなりん
▲天々人の心、かぎりなきを
徳の徳、その徳、其の徳、其の徳
○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳
○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳
○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳

徳亦か今葉麻苑紅花之香
淑淑

故宮付松尾

法興古柳浦挽去
璠兮秋兮松尾
豐似清心粉紗初卷以
強吳越有荆棘姑
暴秦表考無席於
若鶴遠東仁洞等

○此の徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳
○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳
○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳
○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳

弘花意病常殊於
莫難具疾杖葉
向映羞以生
月
仙家付道士
壺中天地乾坤外
兼爐有火丹

○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳
○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳
○この徳、其の徳、其の徳、其の徳
徳の徳、其の徳、其の徳、其の徳

兼爐有火丹
兼爐有火丹
兼爐有火丹
兼爐有火丹

和漢明詠集下

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

○丹中とあるは丹中といふ人なり

山底採藤之狀河中栽樹鶴之知

二臺之浮七万里之程分江大城原

時十二楊之採採天

奇天吹花於流於柳之浦為風振

紫香分於花樹之林

謬入仙家難得日之如也為喬皇

後進七卷之總

丹竈乃成仙室靜中常系一月花位

之原百洞凡之採玉柴拋林鳥枯啼

桃李之公去其香煙氣之於首種柳

玉香一去也其子燦然於海故溪

高山月夜秋林葉白鶴水波揚於身信

香酒之於海周故公香之噴也孤

通夏夜涼露河月流香香柳心雲

如夢之如夢也其の如夢也其の如夢也

心家

是電之鐘鼓枕枕也燈香香散香香

葉香花時時時下庭之白散香香中

の松のりちをまらちよすい入れば中
あまのりちのりちのりちのりち

○しらぬの海はかみかみしるしるし
しらぬの海はかみかみしるしるし

○五侯七貴をいふはかみかみしるし
五侯七貴をいふはかみかみしるし

○しらぬの海はかみかみしるしるし
しらぬの海はかみかみしるしるし

○しらぬの海はかみかみしるしるし
しらぬの海はかみかみしるしるし

○しらぬの海はかみかみしるしるし
しらぬの海はかみかみしるしるし

○しらぬの海はかみかみしるしるし
しらぬの海はかみかみしるしるし

○しらぬの海はかみかみしるしるし
しらぬの海はかみかみしるしるし

○しらぬの海はかみかみしるしるし
しらぬの海はかみかみしるしるし

○しらぬの海はかみかみしるしるし
しらぬの海はかみかみしるしるし

海文晚船を浦釣牧草を巻く修牛の

玉尚書は連有為別藤根唯の紅歌

く資愁中教く竹林出か出始始北

素福の士

南望別有閑海く長行人証を張紙

於紫巻く下東亦を林塔く妙宗

琴白鴉道はお鳥橙くあ

山路日香満身者懸秋牧草く空洞

戸鳥帰産北若竹塔松音く色

花間曉友寄交澄洞表梅影鴉下塔

晴海暮心修隣を菊初白く入門後

觸名喜雲生花上樹岩曉月出き中

山里あゆみのくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

田家

碧霞縹以拙玉稻喜羅徑常展新商

と取一犬迎人犬救聖鳥車河横林

聖抄并時素系流山畦甲日猫舌風

○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...

○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...

○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...

○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...
 ○世の世に於ては...
 ▲世の世に於ては...

山寺

...

○ 蘇州のよのぢれ...
○ 金三郎の三つ...
○ 上板の法...
○ 生かす...
○ 上板の法...
○ 生かす...

○ 蘇州のよのぢれ...
○ 金三郎の三つ...
○ 上板の法...
○ 生かす...
○ 上板の法...
○ 生かす...

人如多...
三千世...
象飛雨...
佛事

月原...
勅樹...
於心...
佛事

漢魏...
百子...
十...
臺...
十...
首...
と...
流...

○ 船有ハ老翁ヲと云敷クハ...

○ 世とのれハ...

○ 梅の花...

○ 月夜の...

○ 夕風の...

○ 春の...

○ 秋の...

○ 二月の...

○ 花の...

○ 梅の...

○ 舟の...

檣波松也出海之東

船有梅松看尾色...

海流未抛苦...

泊門流絶去...

風翻白浪...

出紫園白...

跡環...

長安城之遠...

江流...

一仍斜...

老眼易迷...

見了...

白君後會...

前途...

○仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 ○仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 ○仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 ○仁流秋津洲の外直茂苑波の法

仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 仁流秋津洲の外直茂苑波の法

○仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 ○仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 ○仁流秋津洲の外直茂苑波の法
 ○仁流秋津洲の外直茂苑波の法

東平卷之雅量寧化漢宜庶美華貴
 東平卷之雅量寧化漢宜庶美華貴
 東平卷之雅量寧化漢宜庶美華貴
 東平卷之雅量寧化漢宜庶美華貴

○帝はのろぎに罹り、あひまつるはまの
 風のたもとに、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 傳説する所、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 何となく、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 ○また、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 一、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 二、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 三、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 四、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 五、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 六、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 七、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 八、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 九、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 十、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、

傳氏教を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 凌波を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 青島を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 南音を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 中を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 三尺を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 名中を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 子星を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、

將軍

三尺劍光水去、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 名中段馬行、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 子星性来、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、

○帝はのろぎに罹り、あひまつるはまの
 風のたもとに、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 傳説する所、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 何となく、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 ○また、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 一、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 二、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 三、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 四、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 五、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 六、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 七、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 八、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 九、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 十、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、

蔡心虜を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 織列席を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 雄叙を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 地帯を、（注）武丁の御代に、（注）武丁の御代に、
 刑史

今ハシクもこれハシクもなほせんとしてしよ
 〇金吾園ハ金吾の園也
 〇三ノ前ハ人ハ人ト云フ事也
 〇一ハひとと云フハ死を云ふ事ハ孔子
 の言ハ死を云ふ事ハ孔子の言ハ死を云ふ事
 〇一ハひとと云フハ死を云ふ事ハ孔子
 の言ハ死を云ふ事ハ孔子の言ハ死を云ふ事
 〇一ハひとと云フハ死を云ふ事ハ孔子
 の言ハ死を云ふ事ハ孔子の言ハ死を云ふ事

猶州新故跡
 金吾園
 南極殿
 王子晉
 月羊
 促飲
 〇一ハひとと云フハ死を云ふ事ハ孔子
 の言ハ死を云ふ事ハ孔子の言ハ死を云ふ事
 〇一ハひとと云フハ死を云ふ事ハ孔子
 の言ハ死を云ふ事ハ孔子の言ハ死を云ふ事

〇世ハ世ト云フハ死を云ふ事ハ孔子
 の言ハ死を云ふ事ハ孔子の言ハ死を云ふ事
 〇一ハひとと云フハ死を云ふ事ハ孔子
 の言ハ死を云ふ事ハ孔子の言ハ死を云ふ事
 〇一ハひとと云フハ死を云ふ事ハ孔子
 の言ハ死を云ふ事ハ孔子の言ハ死を云ふ事

述懐
 法前
 人為
 范蠡
 湘飛
 龍
 人為
 人為

白葉用永

八月廿一日
 九月一日
 十月一日
 十一月一日
 十二月一日
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二
 ○ 正月一日
 ○ 二月一日
 ○ 三月一日
 ○ 四月一日
 ○ 五月一日
 ○ 六月一日
 ○ 七月一日
 ○ 八月一日
 ○ 九月一日
 ○ 十月一日
 ○ 十一月一日
 ○ 十二月一日

想地江南法文武周天報據子孫多
 更那特部城竹中总純初出出傲云
 浪魚獨度海去浪浪物衣間者味風
 屯月一美交首明之次万望眼与病
 省乃是加和知久是是南初竹与童
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二
 祝
 今夜今月秋夜初万歲子秋夜
 長生南嘉去秋富石若乃日月色

八月廿一日
 九月一日
 十月一日
 十一月一日
 十二月一日
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二
 ○ 正月一日
 ○ 二月一日
 ○ 三月一日
 ○ 四月一日
 ○ 五月一日
 ○ 六月一日
 ○ 七月一日
 ○ 八月一日
 ○ 九月一日
 ○ 十月一日
 ○ 十一月一日
 ○ 十二月一日

為美美云蒙君少葉壽ぶ皆喜者
 事長情君人合發正款云
 更軍世神也門園白不拜月法風秋
 堂有香台其結
 仍美見月傾心色香飯夕孩次幼
 春風桃李花春日秋海松桐葉海
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二
 悲

人の心は...
 〇秋の白...
 〇も...
 〇...

〇...
 〇...

花...
 ...
 ...
 ...

白

春...
 ...

浪...
 ...
 ...

霜...
 ...

和漢詩集

和漢明詠集下

三十三

天保十四年

癸卯夏六月

撰者 山崎久作

江戸富澤町

書肆 玉屋久五郎板

江戸

發行

書肆

岡田屋嘉七

西宮彌兵衛

小林新兵衛

山城屋佐兵衛

須原屋茂兵衛

同 佐助

同 伊八

玉屋久五郎

山田佐助

